

ある大学生の自己形成について

——サルトルの「自己欺瞞」を手がかりに——

On Self-Development in a College Student: 《La Mauvaise Foi (Bad Faith)》 of J-P. Sartre

満江 亮*

Ryo Mitsue

(要旨)

若者たちの悩みの多くは、自らの社会的役割に関するものである。しかし、「私とは誰か」という形而上学的・存在論的問いに悩まされる若者も少なくない。この悩みは人間が学び成長することとも関わっているが、はたしてこのような形而上学的・存在論的な悩みすらも社会的役割の問題として理解されてよいのだろうか。それは、まるで全ての人間の生活が社会という舞台の上で与えられた役柄を演じることにのみはしまいか。だが、人間は学び続けるとか選択しなおすという活動を通して、獲得した役柄を捨て去り、はっきりとは意識しないまでも、存在の根源的レベルで「私とは誰か」と問い続けながら生活しているはずである。

こうした問題を巡って、本稿初盤では、まず人間の存在の根源性に関する廣松渉とジャン-ポール・サルトルそれぞれの哲学的主張をとりあげ、その異同を考察する。これは〈私〉の意識の存在の根源性を巡るものである。筆者は、人格概念に近い社会性をもった人間のあり方が根源的であるとする廣松の主張と、意識の深層に自分をも否定しうる働きをもつ人間の在り方が根源的であるとするサルトルの主張の対立の整理を試み、意識の根源に触れようとする存在論的議論を教育学で行うことの意義を確認する。また、中盤では、サルトルによりながら、現代のある大学生が旅の途中で経験した、人間の意識の深層に関わる自己欺瞞の事例を扱う。さらに終盤では、サルトルによる世界の根源的選択に依りながら自分探しの旅の記録を読み取ることによって、ある大学生の世界選択の変遷を辿る。これらの考察によって、人間の意識の根源に半透明的に確認できる根源的否定を見出し、その重要性を明らかにする。こうした議論を踏まえたうえで、最終的に筆者は、人間の存在論的次元、すなわち意識の深層における根源的否定に着目することで、現代の若者の自己形成の問題について新生面が見出せるとする。

1. はじめに

思春期や青年期にある若者の多くが、将来どのように生きていけばよいのか、社会でどのように暮らしていけばよいのかという問いを目の前にしながら、日々を送っている。就職か進学かといった、高校生や大学生による

進路選択の悩みはその典型であると言え、こうした悩みは、個人が社会からその一員として承認され適応していく過程、すなわち「社会化 (civilization)」において必要な契機だとさえ言える¹。また、この時期の悩みは、乳幼児期におけるしつけのような外からの指導・訓練とは異なり、自らの存在の社会的価

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

値をいかにして自分自身で獲得するのかといった、内省的なものでもある。こうした若者たちの悩みは、自分が社会から何を期待されているのかということ、つまり自らの役割を社会のうちに求めるときの悩みであると言えよう。若者たちは、こうした社会化に際する悩みを潜り抜けることで、自らが社会人として自分らしい生き方を実現することを期待している。彼らは、よりよい人生を求めるがゆえに悩むのであり、それは生き方についての問題である。

しかし、若者の悩みのうちには以上に挙げたものとは性質の異なるものもある。例えば、教育学者である森田伸子氏の近著によれば、彼らのなかには、自分自身が幼児期の頃の自分とは変わってしまったこと、自分が死ぬということ、そもそも自分自身が存在している／生きていくこと、端的に述べれば「私とは誰か」について問うことによって日常生活に困難が生じるまでに至ってしまう者もあるという²。森田氏は、こうした自己の変容・存在／生・死の問題とは、哲学的・形而上学的・存在論的な問題であるとしている。もちろん、こうした悩みも、社会人へと成長するに際して強く抱く悩みであるとも言えるが、森田氏によれば、こうした悩みは誰もが幼年期には少なからず発した問いであるとする³。

形而上学的・存在論的な問いを幼年期において誰もが発したのかどうかは、ひとまず措く。ただし、こうした問いや悩みは、おそらくそれほど多くの若者は持ちえていないように思われる。というのも、この問いを〈私〉⁴の存在の問題として考察し、森田氏もその近著で紹介している哲学者・永井均氏が述べるように、こうした哲学の問いが一般的に理解されるような公共的な問いになる可能性はありえないからである⁵。また、事物の本質や存在の根本原理を問おうとする「形而

上学」や「存在論」という学問領域が一般の人々には理解不能だと言われたり、またこの言葉がしばしば「観念論」という言葉と同列に扱われ、現実離れた、頭の中で練られた学問であると揶揄されたりすることからも、多くの若者が形而上学的・存在論的な悩みをもつとは考えにくいと言わざるを得ない。さらには、こうした問いを森田氏が不登校経験者による証言や記述を参考にしていることから、形而上学的・存在論的問いを発する若者たちは、社会的に不適応な状態に陥っている可能性が高く、この問いも社会化に際した若者たちの悩みの傾向に含まれると考える者もあるかもしれない。

しかし、思春期・青年期にある若者たちの悩みは、すべて、社会人として認められるために自らの役割を探し求める際に問われるものとして考えてよいのだろうか。彼らの悩みや問いには、形而上学的・存在論的問いは決して含まれていないのだろうか。この問題について、筆者は、ある一人の女子大学生が実際に経験した葛藤の例を挙げることで考察を試みたいと思う。ここに挙げる学生は、不登校経験者でも精神疾患を罹患している者でも哲学を専門に研究する者でもなく、自立した社会人へと自らが成長する際に、さまざまな悩みを抱えつつも自らの力で道を切り拓こうとした者である。この事例を考察することで、一般的な若者が悩み続けながらも自己形成する営みの本質を見出すことができるはずである。

ただし、事例の考察に入る前に、人間の意識、とりわけ〈私〉という意識に関する2つの異なった視点を確認しておきたい。というのも、思春期・青年期における悩みを「個人の社会化の問題」として捉えようと、〈私〉の意識の固有性に根ざした「形而上学的・存在論的問題」として捉えようと、まずは若者

の意識の微妙な活動についての考察を経なければならず、その手がかりとなる視点が必要だからである。その視点となる人間の意識に関する2つの捉え方として、一方は戦後日本の哲学者・廣松渉によるものを、他方は現代フランス哲学界を代表する哲学者ジャン＝ポール・サルトルによるものを挙げる。廣松が〈私〉の存在の他者との共同性・社会性を重視したのに対し、サルトルは〈私〉の意識の根源性を深く追究したと、筆者は考える。ここで双方の主張を比較することによって〈私〉という存在の構造について素描し、これを事例について深く考察するための手がかりとしたい。

2. 役柄存在と自己欺瞞

2-1. 役柄存在

廣松渉(1933-1994)は「共同主観性の存在論的基礎」⁶という論攷で、人間存在の最初の在り方として「役柄存在」を主張している。ジャン＝ポール・サルトル(Jean-Paul Sartre, 1905-1980)は、『存在と無』において、いわゆる「まなざし」論を中心としながら「対他存在(le pour-autrui)」としての意識についての考察を試みたけれども、廣松は、この論攷で「役柄存在」を主張することで、サルトルの「対他存在」について批判している。

サルトルは、『存在と無』において、〈私〉が他者について最も印象的に経験する例として、羞恥の場面を挙げる。実際にサルトルが挙げている例は、〈私〉が好奇心にかられ、鍵穴からある部屋のなかを覗き見ている、というものである。〈私〉の後ろでなにか物音がしたとする。不意に、彼は羞恥にとらわれ、「誰かが私を見ている」と感じるはずである。そのとき、〈私〉は、一瞬にして「覗き屋」

としてレッテル張りされてしまう。他者のまなざしによって、〈私〉は単なるモノに変じてしまうのである。これが、「それぞれの意識のあいだの関係の本質は、共同存在(Mitsein)ではなくて、相剋(conflict)である」(EN II 530/470)⁷とする、サルトルによる「相剋」論の最も基本的かつ有名な場面である。

こうしたサルトルの考察に対し、廣松は「所詮“サディコ・マゾヒズム”の埒を超えることができない」⁸ものとして一蹴したうえで、「役柄存在」について主張する。明示されていないが、ここで廣松はサルトルが別の箇所で挙げた例を用いている⁹。「私」は見張り番である。辺りは一向に別状がないので、「私」はやがてうたたねしかける。突然近くでなにか物音がしたとき、「私」はとっさに人目を感じる。ハッと我にかえり、すぐさま「私」は見張り番らしい態度をとる、というものだ。

この例は、サルトルが挙げる羞恥の場面とは明らかに異なる。廣松によれば、サルトルは「対他存在」としての〈私〉を即自存在のひとつとして考えているという。一方、廣松が挙げた見張り番の例によれば、「それは、まず第一に、『見張り番』という『役柄存在』としての私」¹⁰である。すなわち、〈私〉は「見張り番」としての「私」を演じるのだ。〈私〉は、見張り番としてのあるべき「私」として、役柄を全うすべき自己として存在する。それも、「第一次的に」¹¹、つまり、〈私〉が人目を感じた際にまず最初にあられる非反省的な意識が、「役柄存在」としての〈私〉なのだ。

だが、廣松が主張するこの「役柄存在」が第一次的なものかどうかは疑わしいとする者もあるだろう。というのも、まず〈私〉は、ハッと我にかえって「見張り番」らしい態度をとる前にうたたねをしているからである。うたたねしている〈私〉が人目にさらされているとき、廣松はその〈私〉を「被視存在」¹²であ

るとしている。そして、〈私〉がハッと我にかえったときにまず感じるのは、「なんてことだ！うたたねをしていた！」という驚きである。しかし、こうした驚きは、まさに「私が見張り番である」ということがわかっているときにしか感じられないはずである。つまり、ハッと我にかえて「うたたねしてしまった！」と思うよりも前に、「私が見張り番である」ということを〈私〉は知っておかなければならない。言い換えれば、うたたねをしている「被視存在」としての〈私〉を感じる前に、〈私〉は見張り番としての「役柄存在」でなければならないのである。このようにして、廣松は、こうした「役柄存在」としての〈私〉のあり方が、「対他存在」としての〈私〉として「第一次的」（あるいは非反省的）な仕方であられると主張する。この主張は、〈私〉の「第一次的」なあり方とは、あるがままの〈私〉、つまり「即自存在 (l'être en soi)」としての〈私〉ではなく、常にそれから脱して変わろうとする〈私〉であるということである。こうした廣松によれば、サルトルの挙げた「羞恥」のうちにある〈私〉は、「原基的には、役柄遂行の失敗、つまり、被視存在としての自己から役柄存在としての自己への“脱自的変身”の失敗、人眼の前でかかる失敗を演じた自己についての意識」¹³である。

2-2、自己欺瞞

こうした廣松の主張は、一般的には的確な批判であるとされている。初出当時、この論致は廣松によるサルトルとの対決姿勢を現わしたものであるとされ、学界ではかなり評判になった¹⁴。確かに、多くの哲学研究者が認めるように、廣松によるサルトル批判は的を射たものであるかもしれない。しかし、それでもサルトルは、〈私〉の存在について豊饒

な意味を有しているように思われる。こうした「役柄存在」としての〈私〉についての同様の考察を、サルトル自身の記述からは見いだせないだろうか。もし見出せるのだとすれば、サルトルは廣松とはどのように異なった記述を行っているだろうか。

それは、廣松がサルトルに対抗して挙げた例と同じ例について述べられている箇所が該当するはずである。すなわち、「自己欺瞞 (mauvaise foi)」¹⁵について述べられる箇所である。では、この「自己欺瞞」とはいったいどのようなものか。

まず、サルトルは、「自己欺瞞は、しばしば、嘘をつくこと (mensonge) と同一視される」(EN I 172/82) と述べる。「嘘をつくこと」とは、「嘘をつく当人が完全に真実を知りぬいていながら」別の誰かに対して嘘をつくということである。これは、〈私〉の意識が他者を想定しておきながら、その他者に対して否定的な態度を確信的に行うことであり、嘘をつく者と嘘をつかれる者との二元性が存在している。AがBに対して嘘をつく場合、A自身は真実を知っている。しかし、①Bに対して言葉を口にするときはその真実を否定する。さらには、②その真実の否定をA自身に対しても否定することで、完璧な虚言が成り立つ。嘘をつくときの場合、この二重の否定が成立しなければならない。(EN I 172/82参照)

これに対し、「自己欺瞞」とは、その否定的な意識を他者に向けるのではなく、「自分自身に向けるような態度を選んで検討することである (EN I 172/82)。もし自己欺瞞が自分に対する虚偽であるとしたら、私は自分が嘘をつく者であるとわかっていながら、自分が嘘をつかれる者であることもわかっていなければならない。しかし、それは不可能である。というのも、自分自身に対して嘘をつ

くことが完璧に行われるには、嘘をつく〈私〉が嘘をつかれる〈私〉に対して隠れていなければならないが、それでは嘘をつくことができなくなってしまうからである。つまり、自己欺瞞では、嘘をつく者と嘘をつかれる者とが同一の〈私〉なのであり、嘘をつく者と嘘をつかれる者との二元性が成立しないのである。よって、自己欺瞞は嘘をつくことではないのである。このことより、自己欺瞞とは「私自身に対して真実を覆い隠す」ことなのである(EN I 175/83)。さらに、自己欺瞞における意識は、「自ら好んで自己欺瞞に自分をあてがう」のである(Ibid.)。

では、サルトルのいう「自己欺瞞」とは具体的にどのようなものかについて、例を挙げながら見てみよう。「私」は、ここでは見張り番ではなく、喫茶店の店員であるとする。「私」は、いかにも喫茶店の店員らしく、きびきびとした態度を振る舞う。「私」の持つお盆は絶えず不安定であるが、その都度、その運動機能によって均衡を回復する。店の客にとっては、「私」の運動のすべてがなにかのメカニズムのように思われる。サルトルは、このときの〈私〉を端的に以下のように表現する。

彼は事物のもつ非常な迅速さと敏捷さを自己に与える。彼は演じている。彼は戯れている。しかし、いったい何を演じているのであろうか？それを理解するには、別に長く店員を観察する必要はない。彼は喫茶店の店員であることを演じているのである。[...] 喫茶店の店員は自己の身分をもてあそぶことによって、その身分を実現する。(EN I 199-200/94 強調はサルトル)

喫茶店の店員である「私」は、例えばグラスがグラスであるような仕方、つまり「それ

があるところのものである」ような〈私〉、サルトルが言うところの「即自存在 (l'être en soi)」としての〈私〉としてでは決してありえない(EN I 65/32)。まるで、一人の俳優がハムレットに扮するような〈私〉、つまり「それがあらぬところのものであり、それがあるところのものであらぬ」という、サルトルが言うところの「対自存在 (l'être pour soi)」としての〈私〉が、ここには存在する(Ibid.)。まさに〈私〉は「喫茶店の店員であることを演じているのである」。こうした場面では「あらゆる方面で、私は存在から脱れ出る」のだけれども、「にもかかわらず、私は存在する」状態にある(EN I 203/95)。

もちろん、このように自己欺瞞のうちにあるのは喫茶店の店員だけではない。自己欺瞞は、どのような〈私〉においてもあてはまるのだ。食料品屋であってもいいし、大学生や政治家であってもかまわない。誰もがあらゆる状態において、「自己欺瞞」に陥っているのである。だが、このように見てみると、「役柄存在」としての〈私〉と「自己欺瞞」における〈私〉は、両者ともよく似ている。なぜなら、どちらの場合も、舞台上の役者が自分の役柄をあてがって演じているように、社会という舞台の上でなんらかの振る舞いを見せる〈私〉として存在するからである。このことから、廣松の「役柄存在」もサルトルの「自己欺瞞」もよく似た概念であると言えるかもしれない。

しかし、「役柄存在」と「自己欺瞞」とは決して同一のものではない。実は、決定的な相違点があると筆者は考える。それは、廣松は「役柄存在」としての〈私〉を「第一次的」な存在であり、さらに根源的なレベルについて追わないけれども、サルトルは「自己欺瞞」としての〈私〉を廣松が考えるような「第一次的」な存在とはしていないという点であ

る。というのも、先に見たように、自己欺瞞の〈私〉には、さらに「根源的originel」(EN I 471/210) なレベルで、2つの相矛盾する否定的な態度が存在するからである。もし自己欺瞞が「第一次的」であれば、そのうちにある否定的なものについてさらに問われることはありえない。すると、この否定的なものが、サルトルが考える〈私〉における「根源的」な存在についての手がかりになると考えることができる。では、この否定的なものとはいったい何であろうか。この答えを導くためには、サルトルが考える〈私〉の意識についての基本的な構造について言及するところから始めなければならない。

2-3、志向性・非措定的意識・否定性

サルトルは、エドムント・フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)が提唱する現象学から「志向性(intentionalité)」という意識のはたらきを学び、その本来的なあり方を「あらゆる意識は、何ものかについての意識(*conscience de quelque chose*)である」とする(EN I 32/17 強調はサルトル)。また、サルトルの初期論攷「フッサールの現象学の根本的理念—志向性—」では、意識とは何か「に向かって自己を炸裂させる」(*s'éclater vers*)ものであり、「じっとりとしたお腹の中の親密さ(*la moite intimité gastrique*)からぬけ出て、彼方に、自己を超えて、自己ではないものの方へ」と「走ってゆくこと」であるとも述べられている(SI 30/27)。こうした考えに従えば、例えばグラスは、決して私たちの「意識のなかにあるのではなく、「空間のなかにある」のだとみなすことができる(EN I 32/17)。グラスについての意識は、例えば自分の脳内にある何かの事物ではなく、空間のなかにあるグラスそのものと直

接関係するはたらきである。意識は志向性としてのはたらきをもつのだと考えれば、さらに、意識とは「世界についての措定的意識(*conscience positionnelle du monde*)」であると考えられる(EN I 32/18 強調はサルトル)。

サルトルが考える意識のはたらきについて、初期の著作『自我の超越』の記述も参考にしながら、先に挙げた喫茶店の店員の例に即して考えてみよう。例えば、きびきびと働いている喫茶店の店員の意識は、グラスやお盆、お客などに向いているはずである。このとき、この店員は自分自身に意識を向けておらず、私の意識は店内にある諸々のものに気を取られている。彼の意識は対象に没入しているといってもよいだろう。このように「自分に対してその対象ではない」意識、つまり「意識の対象の方はその性質からして意識の外部にあり」、それゆえ対象を「措定もし、把握もする」意識を、サルトルは「非反省的意識(*conscience du irréflechie*)」と呼ぶ(TE28/24)。

さて、そこで、ある客がこの店員に「君はいったい何者かね」と尋ねたとする。もちろん、彼は「私は喫茶店の店員です」と答えるだろう。このとき、彼の意識は、自分自身に対して「反省する意識(*conscience réfléchiante*)」(TE31/28 強調は筆者)であると言えるだろう。しかし、それと同時に、彼の意識は、自分自身から「反省される意識(*conscience réfléchie*)」(Ibid. 強調は筆者)でもある。このとき、反省する意識が「反省される意識を、それ自身に対して顕示するのではない」(EN I 37/19)、つまり、反省する意識が反省を可能にするのではなく、むしろ反省される意識が反省を可能にしているのだとサルトルは主張する。反省をする前に、その反省を可能にする意識が存在するの

だ。この意識は、「反省されることなしに過ぎられてきた」状態、「私のすぐ前の過去においても決して反省されないままにあった」状態の意識である (EN I 19/36)。喫茶店の店員の例に即して言えば、確かにこの店員はすっかり喫茶店内の事柄に意識が向いているけれども、このとき「自分が喫茶店の店員として働いている」という事実についての意識、しかも、その事実についてそれとなくわかっている〈私〉についての意識も携えているのだ。それゆえに、彼が客に声をかけられたとき、自分の状況を説明することができるのである。サルトルによれば、こうした自分の状況を端的に了解している意識を「非措定的意識 (conscience non-thétique)」と呼ぶ (EN I 36/19)。

しかも、喫茶店の店員は、必ずしも現在の自分の状況だけを端的に了解しているわけではない。というのも、ある客が「君はいったい何者かね」とではなく、もし「君は喫茶店の仕事が終わったらどうするのかね」と尋ねた場合でも、彼はすぐさま「友人と待ち合わせがあります」などと答えられるはずである。喫茶店の店員である〈私〉は、友人と待ち合わせをする〈私〉ではない。サルトルの記述にしたがって言えば、喫茶店の店員である〈私〉は、友人と待ち合わせをする「〈私〉の不在において」考えられている〈私〉であり、「空虚な概念、空虚なままとどまるよう運命づけられた概念」を携えた〈私〉である (TE71/71)。このように、意識の根源的なレベルにおける「不在 (absence)」や「空虚な概念 (concept vide)」と称されたものが、先に述べた否定的なものである。

このことから、人間の意識の深層においては、自分の状況を端的に了解している「非措定的意識」が存在し、それは「根源的否定 (la négation originelle)」 (EN I 471/210)

と呼ばれ、その存在構造の中には「否定性 (négativité)」 (EN I 113/56) が垣間見えるということが主張できる。また、サルトルは、自己欺瞞を否定性によって説明する際に、「人間存在は、単に世界の中に否定性 (négativité) をあらわれさせる存在であるばかりでなく、自己に対して否定的態度 (des attitudes négatives) をとりうる存在でもある」 (EN I 170/81) とし、また「私の意識は、一つの『否 (Non)』として、世界の中に出現するはずである」 (Ibid.) と述べている。これが、廣松の「役柄存在」とサルトルの「自己欺瞞」との違いを明確にするものである。

だが、もしかすると、この「根源的否定」をもって、廣松とサルトルの主張が同一のものであるとする意見もあるかもしれない。というのも、廣松が「『役柄存在』は、自己のあるべき在り方であって、レアルには不在というよりは未在である」⁶⁾と主張するからである。これは、喫茶店の店員である〈私〉は、友人と待ち合わせをする〈私〉ではないことにおいて捉えられるのではなく、友人と待ち合わせをする〈私〉では未だないものとして捉えられるのだというものである。また、先のサルトルの喫茶店で客が店員に「君はいったい何者かね」と尋ねて店員が「私は喫茶店の店員です」と答えられるとき、この店員においては、自分の身分を尋ねられた「被視存在」としての〈私〉が、「自己のあるべき在り方」として、喫茶店の店員という「役柄存在」としてあらわれたのだと主張することもできる。しかし、これらは言うなれば、サルトルの言うところの「非反省的意識」と「反省する意識」の関係だけで捉えられていることである。非措定的意識は、これらとは異なるレベル、さらに根源的なレベルにある。サルトルによれば、非措定的意識がはたらく際には「まったく反省する意識など必要としな

い」のであり、「ただ端的に、意識（＝非措定的意識）は自分自身に対して自分を自分の対象として措定することがない」のである（TE29/32 括弧内は筆者）。

例えば、喫茶店の店員である〈私〉は友人と待ち合わせている〈私〉ではない。また、同様に、友人と待ち合わせている〈私〉は喫茶店の店員ではない。当然のことながら、いまの〈私〉は過去の時点の〈私〉ではないのだ。このようにして、〈私〉には時間軸に沿ってさまざまな「否定性」が見てとれる。

さらに、非措定的意識が携える否定性には複雑なものがある。もし喫茶店の店員が店長から「店員は店員らしく、お客様と誠心誠意を持って接しなければならぬ」と訓示を受けた場合、実際に彼が優秀な店員であってもなくても、「自分はよい店員であろう」と意識してしまう、といったことはしばしば経験されることである。このときの店員は、いつもならなんとも感じない自分の一つ一つの行動が、なんとなくいつもと違うものとして意識され、自分の行動について気にするようになってくる。サルトルが、まるで「注意深い者でありたいと思う注意深い学生が、[…] 注意深い者を演じるあまり、ついにはもはや何も聞こえなくなってしまう」（EN I 203/95）と例示するように、店員にとっては、自分の動作がなんだかぎくしゃくしたものであるように感じてしまう。これは、自分が「コップがコップであるのと同じ意味で」（EN I 200/94）喫茶店の店員ではなかつたのであり、喫茶店の店員としての自分を自分であてがっていただけであることの証明である。しかも、〈私〉は（即自的には）喫茶店の店員ではないという「否定性」は、店長から訓示を受けてから存在するのではなく、「私がそれであらぬところのものであるというあり方において」（EN I 202/95）常に自ら携えてい

るのであり、店長の訓示によって初めて自分自身に示されたのである。というのも、「措定的意識」は常に何かについての意識であるため、その措定的意識についての意識である「非措定的意識」も常に〈私〉のうちにあるからだ。そのため、非措定的意識は、反省を必要とせず、文字通り自分を対象として措定しなくても存在する意識なのである。そして、非措定的意識は、「私は喫茶店の店員である」とする〈私〉についての意識であり、決して「役割存在」が想定するような、私は喫茶店の店員である（として存在する）意識ではないのである。

このように、喫茶店の店員の例だけでも、「自己欺瞞」についてのさまざまなレベルが見いだせた。また、先述の通り、いつでも誰でも「自己欺瞞」の状態にあるのであれば、そのレベルやヴァリエーションはさらに多様なものがあると考えることができる。しかし、〈私〉の意識の深層において「非措定的意識」と呼ばれる意識があり、それは「根源的否定」を携えているという「自己欺瞞」の基本的な構造は、全く変わらないのである。

2-4. 教育学を存在論的次元で議論すること

さて、これまで「役割存在」と「自己欺瞞」の異同を検討することで、人間の根源的な存在の所在を明らかにしようとしてきた。これまでの議論をまとめると、以下になるだろう。廣松の主張する「役割存在」としての〈私〉はそれ自体第一次的であるとされるので、それ以上に根源的なものを求めることができない。さらにいえば、「役割存在」は人間の意識の深層のレベルまで捉えられていないものであるため、これは決して廣松が言うところの「第一次的」な存在であるとは言

えないのである。一方、サルトルの主張する「自己欺瞞」は、〈私〉のうちの最も根源的な部分、すなわち、意識の深層のレベルにおいて「根源的否定」を携えた「非措定的意識」がある。〈私〉という存在は、確かに「役割存在」と呼ばれるような、他者との関係のなかで生きる共同的・社会的存在のレベルもあるかもしれないけれども、決してそれが最も根源的な存在ではなく、人間存在にはさらに意識の根源のレベルがあるのだ。共同的・社会的な人間存在の形態が「自己欺瞞」と呼ばれるときには、「否定性」が垣間見える意識のさらに根源的なレベルが捉えられているのである。筆者が1.で述べた「個人の社会化の問題」と「形而上学的・存在論的問題」の二項対立に即して2人の考えを整理するならば、廣松の主張は「個人の社会化の問題」に近い考え方であり、サルトルの主張は「形而上学的・存在論的問題」に近い考え方であると言えるだろう。

以上のように、サルトルは、『存在と無』において、現実の人間が否定性をもって生きていることを見逃さずに記述しようとしている。彼が挙げる例は、喫茶店の店員だけではない。彼は、私たちの生活に身近な例を数多く挙げながら、それらを詳しく考察している。その考察は、読者にまるで小説を読んでいるかのような気分させる。それが、サルトルのテキストが「哲学と文学とを融合させ、哲学的な文学、文学的な哲学をつくりあげ、個的体験を通して普遍的真理に至ろうとする情熱」⁷⁾に満ちていたと評される所以であるといえるだろう。しかも、その文学的なテキストからは、彼が人間の意識の複雑さを、その存在構造は踏まえながらも単に一般化するのではなく、存在の形そのまま、人間の意識に寄り添う形で捉えようとしたことがつぶさに見てとれる。

こうした試みは、教育学においても重要であるだろう。私たちは、自分の人生の中で「学び続ける」とか「選択しなおす」といった仕方で、自ら獲得した「役割」について疑ったうえでそれを否定し、そこから脱け出そうとすることがよくある。これはつまり、これまで生活してきた環境を変えることで自分の「役割」を問いなおし、必要であれば自分を変えようとすることである。自分の社会的役割に疑問をもつことは、確かに「役割存在」の次元で議論することができる事柄のような気がする。けれども、この場合、〈私〉はその社会的役割そのものからは出てこられないため、そもそもその社会的役割をなぜ問い直そうとするのかについては言及することができないのである。一方、サルトルの立場に立てば、私たちが自分自身を振り返って見つめるとき、実は〈私〉の意識は「役割存在」や「自己欺瞞」の状態にのみ立っているのではなく、存在論的次元である「根源的否定」をそれとなく確認していると捉えることができる。サルトルが主張した人間の存在構造、すなわち、人間の意識の深層には否定性を携えた非措定的意識が存在し、それは半透明性を持って見てとれるものであるとする構造は、自分自身の存在について問い変革しようとする営みに密着する教育学の領域と深く関係するところがあるはずである。

このように廣松とサルトルという2人の哲学者のテキストを検討することで、〈私〉という意識をもつ人間の存在の根源を確認し、自らの役割を探し求める際に問われるものとして考えてよいのかどうかについての考察を行ってきた。ところで、本稿の目的は、実際にこの現実には生きている人間が自分の人生について大きく悩み、選択や決断を迫られる場面に即して、とりわけ、自立した社会人へと自らが成長する際に、さまざまな悩みを抱え

つつも自らの力で道を切り拓こうとする思春期・青年期にある若者たちの現実に即して考察することである。このような仕方では人間の意識を捉えると言うことは、意識の複雑さをそのままの形で捉え、自分自身の存在について深くかつ繊細に感じるということである。この視点によって、自分自身を問い直す機会に満ちている思春期や青年期の人間において語ることが、単に「個人の社会化」という問題に終始するのではなく、さらにその意味が豊かなものとして捉えられるようになるはずである。若者たちが自分の社会的役割を問おうとするとき、その社会的存在を問い直すだけでなく、その存在論的次元に直面することにもなるはずだ。また、この考察を経ながら、考察された者が現実に存在すること／生きていることはどのような意味をもつのかという点まで言及したい。そこで、ここからは、これまでの議論と照らし合わせながら、筆者のある友人が大学生だったときに「自分探し」の旅をし、その最中で経験した出来事に基づいて記述した文章を考察しながら、若者が悩み続けながらも自己形成する営みの本質を見出す作業を進めていきたい。

3. ある大学生の自己形成

3-1. 自己欺瞞に陥ること

安溪遊地・安溪貴子両氏の編集による書籍『出すぎる杭は打たれない 痛快地球人録』（みずのわ出版、2009年）に「世界一周しちゃいました」という文章を掲載した小川美農里さんは、1984年福島県で生まれた。高校は三重県の農業高校に通い、東京で農業系の短期大学で学んだあと、山口県立大学看護学部に入學した。兄弟も多く、彼女はその5番目である。高校生のときに青年海外協力隊の兄と

いっしょにパラグアイへ行くなど、海外の経験は豊富である。また、大学在学中は国際医学生連盟に所属し、国際的な医療ボランティア活動も積極的に行っていた。2007年度は大学を休学し、2007年5月から2008年3月までは世界一周の旅に出かけた。安溪両氏編著の書籍に掲載した文章は、彼女が世界一周旅行から戻った翌年の1月に行われた、アムネスティ・インターナショナル山口グループの新年例会での彼女の講演をもとに書き下されたものである。

小川さんの世界一周の旅は、「南米を出発して北上し、中米・北米を経て、東アフリカに行き、ヨーロッパ、インドを廻って帰って」¹⁸くるというコースであった。彼女にとってどの国での体験も印象深いものであったはずだが、特にエチオピアでの経験が印象に残ったようで、彼女自身も「本当に忘れられません」¹⁹と報告している。そこで経験した出来事は、世界の矛盾を如実に表すものであると同時に、人間の意識の複雑さを露呈させるものであった。その体験について、彼女の文章を要約しながら以下に記述する。

発展途上国の都市部では、多くのストリートチルドレンが住んでいる光景が目に入るが、エチオピアの首都アディスアベバもその例に漏れない。その地に降り立った小川さんの言うところでは「エチオピアの人はとても人懐っこく」²⁰、観光客などはよくストリートに住む女の子に呼びとめられる。普通の観光客は呼びとめられても知らぬふりをするが、彼女は呼びかけた女の子の方へ近づいて行った。すると、「彼女たちは驚いたような笑顔を見せてくれた」²¹という。彼女たちは、5～6人で共同生活をしていた。そのなかの17歳の女の子リータには、生後数か月の赤ん坊ラブリーがいた。彼女は貧しくてなかなかミルクが買えなかったので、小川さんはいっしょ

に買い物に行ってミルクを買ってあげたりしていた。彼女が遊びに行くと、リータたちは笑顔で迎え、いつも「ぎゅっと抱きしめて挨拶をしてくれ」た²²。

しかし、そのうち、小川さんがリータたちを訪ねない日には、彼女が泊っているホテルの前までやってきてミルクをねだるようになった。そこでいつもと同じようにいっしょに買い物へ行った。最初は「彼女たちと一緒に歩くことで、すこしでも彼女たちの視点から社会を見ることができるよう気がして嬉しかった」けれども、このときから「ミルクを買うことが毎日の日課ようになっており、心のどこかですこし重荷のようにもなって」きた²³。そして、彼女がエチオピアを発つ直前に、彼女にとって本当に忘れられない出来事が起こったのである。

ある日行ってみるとリータとラブリーがいません。聞いてみると病院に行ったということでした。ラブリーはそれ以前から微熱があり、顔色もあまりすぐれなかったので、病院に行ったと聞いて少し安心し、その日はそこを離れました。すると翌日、リータはホテルの前で私を待っており「ラブリーの手術代がなく手術できないでいる。どうか助けてほしい」と言いました。私はとても悩みました。お金を渡す行為は、お土産のバナナを持っていくこととも、ミルクを買うこととも違って、友人同士という関係ではなく、「お金を援助する人ともらう人」という明らかな上下関係を作り出してしまふような気がしたからです。返答に困っている私の隣で、一緒にいたエチオピアの友人が「みのは、この子を助けたいの？」と聞いてきました。私は「助けたいか」という質問には「助けたい」と答え、しかし、そのとき言われた金額を持っていなかった

ため「でも十分な金額を持っていない」と伝えました。お金を渡すこと自体に葛藤があったことは伝えませんでした。するとその友人は、「君が助けたいなら、僕はそれをヘルプするよ」と、金額の半分をさっさと出してくれたのです。

私はその友人と一緒にお金を出すことで「日本人—金持ち—がお金を渡す」という構図ではなく、ひとりの友人として助けたいという気持ちがあつて渡したのだという安堵感が湧いてきました。²⁴

さて、わたしたちは小川さんが体験したこの事例をどう理解すべきだろうか。彼女の体験は、病を患った赤ん坊を目の前にしてどのような行動をとるべきかという倫理的問題を孕んだものであるため、この出来事を倫理的に考察することも十分可能であろう。しかし、本稿では、この事例を一般的な「モラルジレンマ」の事例として扱うのではなく、小川さんがリータと出会うことで小川さんの意識のなかで何が起き、また彼女の意識がどのように変化したのかを明らかにしたいと考える。

この事例を考察するにあたって重要な点は、「小川さんとリータは友人である」ということである。というのも、小川さんがリータとの関係を友人同士の関係であるとみなすことで、彼女は自己欺瞞に陥ってしまうからである。なるほど、確かに彼女はリータにミルクを買ってあげたり、ラブリーの手術代を半分払ってあげたりした。もちろん、こうした行為は十分金持ちらしい振る舞いである。しかし、小川さん自身はできるだけ日本人らしい「役柄」を振る舞おうとはせず、ストリートチルドレンを無視することはなく彼女たちの呼びかけに答え、ミルクが欲しいときは「いっしょに買い物に行ってミルクを買っ

てあげたりしていた」。そのため、小川さんは「すこしでも彼女たちの視点から社会を見ることができるよう気がして」うれしい気持ちになり、リータと友人関係を深めることができたのである。小川さんはリータを友人だと思っているし、リータも小川さんを友人だと思っていると小川さんは信じている。

けれども、サルトルの言うように、実際のところ、単に小川さんはそれを信じているだけであって、「それについて明証をともなった直観をもっているわけではない」とも考えられるのだ (EN I 224/104)。もちろん、小川さんがリータを訪ねると、リータは笑顔で迎えてくれ、いつも2人は抱きしめあった。こうした振る舞いから、2人は友人同士であると言えるかもしれない。しかし、2人が出会ってから毎日のように顔を合わせていたことを記述している時点では、彼女は「リータは私の友人であり、リータにとっても私が友人である」など書いてはいない。おそらく、小川さんはリータと出会ってしばらくのあいだは、彼女を友人だとはっきりとは意識しなかったはずである。というのも、実は、一連の文章のうち、彼女がリータを友人だと初めて明確に述べるのは、まさにリータがラブリーの入院費を欲しがるときの場面なのである。まずは、リータがホテルの前でミルクをねだるようになってから、小川さんはリータと自分との関係をそれとなく捉え返し始めたと考えられる。というのも、その頃から、彼女はリータと一緒にミルクを買いに行くのが重荷になってきたからである。それは、小川さんが、これまで気付かなかったリータとの関係について問い直し始めること、つまり「リータと私はいったいどんな関係か」と問い始めることにはかならない。そして、ラブリーが手術を受けるという段階になって、さらにはっきりと彼女がリータとの関係を捉え

返すことになったのである。このとき、小川さんは手術代を出すことは「友人同士という関係ではなく、『お金を援助する人ももらう人』という明らかな上下関係を作り出してしまふ」のではないかと報告する。このことから、彼女は、リータとの関係に疑問や不安をもつようになってから始めてこれまでの2人の関係について問い、最終的に「友人同士」であると信じるようになったと考えられる。小川さんがリータは小川さんを友人だと思っていると信じるときは、小川さんがそれを信じているのを知るときのみなのだ (EN I 224-225/105参照)。

このように、小川さんが「私とリータは友人同士の関係である」と初めてはっきりと気付くのは、2人の関係を問い直し捉え返したときである。しかも、その気付きは単なる気付きであり、信じていることを信じているというだけであって、このときにそれを支える確たるものを見出したわけではないと言えるだろう。さらに、このことをさらに補強する事柄が、彼女による以下の記述から見出される。この出来事について、彼女は帰国後に友人に伝え、賛否両論の反応が返ってきたというが、友人たちの反応に彼女は煩悶しながら、以下のように述べている。

[...] そして友人の「その家族を一生面倒みるつもりがないのなら……」という言葉も理解できるようになりました。しかしだからといって「物乞いをする人にはお金を渡さない」と決めて、かれら一人ひとりから目を背けることは、私はしたくないと思うのです。もちろん、目を背けるほうが気持ちは楽ですが、現実に目の前に存在するひとりの人なので、無視したくないと思うのです。

リータは嘘はついていなかった、と私は

思います。ただ、私はこの翌日にエチオピアを離れたため、手にしたお金で実際にラブリーの手術を行ったかどうかはわかりません。私が安易に渡したお金によって、価値観が変わり、努力することが無駄だと感じてしまったりしていないかという不安もあります。²⁵

出会って2週間とはいえ、2人は友人同士の関係だったとみなせるかもしれない。少なくとも小川さんは、出会ってからずっと2人が友人であることを、はっきりとではないが、それとなく信じていた。しかし、それをはっきりと知ったのは、その関係性に疑問を付さなければならない出来事が起こったときであった。つまり、リータは自分の友人であり、リータも自分を友人だと思っていると信じていたことを彼女が初めて知ったのは、この目の前の友人が心底困っている場面に出くわしたときであり、その関係性がすでに崩壊するか否かの瀬戸際に立たされたときだったのである。しかし、それでも、彼女は最終的には「現実的に目の前に存在するひとりの人なので、無視したくない」と思い、「リータは嘘をついていなかった」と自分に言い聞かせようとしている。

さて、小川さんがこのような経験をすることで、彼女の意識のなかで何が起き、また彼女の意識はどのように変化したのかを、人間の意識の存在を根源的なレベルからつぶさに見てとろうとしたサルトルの記述にしたがって考察すると、どのようなことが言えるだろうか。まずは、彼の「信念 (croyance)」についての記述から見てみよう。

信念は、それ自身の存在において自己を問題とするような一つの存在であり、自己の破壊においてしか自己を実現しえないよ

うな一つの存在であり、また、自己を否定することによってしか、自己に対して自己をあらわしえないような一つの存在である。それにとっては、あるとはあらわれることであり、あらわれるとは自己を否定することであるような一つの存在、それが信念である。信じるとは、信じないことである。[...] 真真正直の理想（自分が信じるところのものを信じること）は、誠実の理想（自分はあるところのものであること）と同じく、一つの即自存在的な理想である。あらゆる信念は、十分に信念であることはない。われわれは決して自分が信じるものを信じているのではない。したがって、自己欺瞞の原初的な企ては、意識事実のこの自壊作用を利用することでしかない。(EN I 225-226/104-105)

この記述を手がかりに、小川さんの事例を理解してみよう。確かに、彼女はリータが自分を友人だと思っているとそれとなく信じていたかもしれない。しかし、それをはっきりと信じることになったのは、そのように信じていることそれ自体を問うような事態に至ったときである。すなわち、自分自身の信念に対して問い、否定する可能性が垣間見えたことで、初めてそれがはっきりとあらわれてくるのである。小川さんがリータは自分を友人だと思っていると信じることは、そう信じている自分自身を否定する可能性が出てきて初めて浮かび上がってくる事柄である。

さらに別の角度から見れば、小川さんがリータは自分を友人だと思っていると信じていることを初めて明確に確認したときでさえ、彼女はそのことを十分に信じているわけではないとも言える。というのも、彼女は決してリータが自分を友人だと思っていると全面的に信じているわけではないことをそれと

なく知っているからこそ、彼女が「リータは嘘はついていなかった、と私は思います」と発言するからである。リータは嘘をついているかもしれない、友人ではなく単なる金持ちとしてだけ自分を見ているかもしれないということを覆い隠すために、彼女は、リータは嘘をついていないと自分に言い聞かせているのだとも考えられる。このときの小川さんは、まさに、リータは自分を友人だと思っていると信じる（私）を自分であってがっているのであり、自己欺瞞に陥っているのであるといえる。

こうして、「信じるとは、信じないことである」という、矛盾に満ちた命題が導き出される。また、以上のことから理解できるように、信念に関する根源的な考察は、同時に「自己欺瞞」についての考察になっているのである。サルトルは「自己欺瞞 (la mauvaise foi) は信念 (croyance) であり、自己欺瞞の本質的な問題は信念の問題である」(EN I 221/103) と主張するが、小川さんとリータとの友人関係についての考察から、彼の主張の真意が判明できるであろう。

ところで、小川さんとリータとの友人関係についてこのように考察してみると、小川さんの意識のうちには、さまざまなヴァリエーションの否定性が存在することもわかる。しかも、その否定性はつねにそれとなくわかっているという仕方で垣間見えるのである。はっきりと意識されるのではなく、それとなく、サルトルの言葉で言えば「半透明性 (translucidité)」(EN I 225/104) を持って、彼女の意識の深層に、根源的なレベルに否定性が見えるのである。喫茶店の店員が自分には意識を向けずにひたすら仕事をするように、小川さんはリータとの生活を楽しんでいた。しかし、喫茶店の店員が店長から訓示を受けると自分の行動がぎくしゃくしたものと

して感じられるように、小川さんはリータといっしょにバナナやミルクを買いに行くことを何度も経験するうちにリータとの関係に疑問を持つようになった。「リータと私とはいったいどんな関係か」と問うことは、「実は互いは何の関係もないのだ」という否定の答えも見え隠れするように問うことである。それもまた、これらはすべてははっきりとはなく、それとなくあらわれる問いである。また、彼女がエチオピアを発つ前日に直面した出来事によって、彼女がリータは自分を友人だと思っていると信じていることを確認したり、後日リータは嘘をついていなかったと思ったりすることは、実は彼女がそれとなくそれらを信じていないことが見え隠れしていることの証なのである。このようにして、小川さんの意識の深層には、半透明的に見え隠れする否定性が存在するのである。そして、それはとりもなおさず、小川さんがリータと自分は友人関係だと信じている「自己についての同一の非措定的意識」²⁶ (Ibid.) のレベルのことであり、この非措定的意識が否定性を常に携えている。それゆえ、サルトルは「非措定的意識は、まさにその半透明性ゆえに、あらゆる知の根源にある」(Ibid.) と主張するのである。

3-2、根源的否定の消極性と積極性

さて、小川さんがエチオピアで体験した一連の事柄について、以下のように総括できるだろう。小川さんは、「日本人=金持ち」というような振る舞いはせずに、リータと親交を深めようとした。しかし、リータの要求は小川さんに不安をもたらした。それは、漠然としたものではあるけれども、2人の関係について問い返し始めるという意識のはたらきであった。そして、リータが我が子ラブリー

への援助を彼女に求めたとき、さらに2人の関係を捉え返し、小川さんは初めて「私と彼女は友人同士である」と信じていたことに気付いたのである。ただし、その気づきは単なる気づきであり、小川さんはそれを信じているだけであって、確たる証拠に基づいて互いの友人関係が成立しているというようなものではない。このことは、とりまなおさず、「《自分が信じるところのものを信じないこと》を避けよう」とし、「《自分が信じるところのものを信じないこと》において、存在を避ける」と表現される自己欺瞞の一例であると理解できる (EN I 227/105)。このようにして、小川さんは、自分が信じるところのものを信じないといった意識の深層にあるはたらきによって、自己欺瞞へ陥ったのである。これは、もちろん彼女の意識の深層には非措定的意識が存在することによって、つまり意識の根源的なレベルで否定性を携えていることによって起きることである。

彼女がエチオピアで体験した出来事は、決して特異で非日常的なものとして片付けられるものではない。彼女ほど極端な例でなくても、わたしたちは、自分がどのように行動すべきなのかという判断に迷った事態に直面することがよくある。だが、こうしたジレンマの背景には、自らの意識のうちに非措定的意識が存在する〈私〉なる人間が実際に悩みながら判断しているという事実があることを忘れてはならないだろう。このように、モラルジレンマの一例として捉えられる事例には、現実に生きる人間の意識の複雑さが見てとれるのであり、それを考察するには存在論的次元で議論することが不可欠である。

しかし一方で、新たな問題も発生する。現実に生きる人間の意識を存在論的次元で議論することは、表面的には仲良く見えた友人関係の脆弱性を暴くだけに終始するものなので

あろうか。小川さんの紀行文を一読するだけでは確認できなかった意識のうちに眠る「根源的否定」は、単に人間相互の関係性を消極的なものにし、リータと小川さんとの友人関係の薄弱さを表すものなのだろうか。筆者の考えでは、決してそうではない。この事例に関して存在論的に考察することで、確かに2人の関係の薄弱さが露呈されてしまったように見えるかもしれない。だが、このことは、友人関係が否定性を孕んでいることによってたえず問い直され更新され続けていることを意味している。リータと小川さんはこの事件以来顔を合わす機会を得ていないけれども、実際に小川さんはこの事件を最も忘れられない出来事として記憶し、事あるごとに思い出し、リータとの関係についての意味を問い直し続けているのである。

このように、意識の深層に孕まれる根源的否定によって、出来事の意味がたえず更新されるという事柄は、友人関係の信頼性に限ったことではない。むしろ、3-3. で扱おうとする「自分探し」の例は、旅の途中でのさまざまな経験や出来事を通して、自分自身の意味を更新していく営みの典型であると言ってよいだろう。3-3. では、意味の更新の積極性を確認することで、「根源的否定」の重要性をさらに見出していきたい。

3-3、意味において世界を選択すること

3-1.では、小川美農里さんのエチオピアでの経験について考察した。そこでは強調しなかったが、彼女の世界一周の旅は一種「自分探し」としての趣を呈している。ここで、彼女が世界一周することを決心した経緯や、旅の終わりに感じた彼女の心境の変化について一瞥し、それがエチオピアでの経験とどのように関係しているかを検討しておきたい。

この検討は、人間存在の意識の深層に「根源的否定」があることを認めることが小川さんにとっては具体的にはどのようなことが言えるのか、またこうした検討によって小川さんに何をもたらすだろうかということを確認することになるだろう。

さて、まず彼女が世界一周の旅を行った理由を、以下に引用してみよう。

大学で四年間、ただ学校に行っただけでは、せっかく学べる座学も体には入らず、頭から抜けていってしまうような気がしています。それで、2007年に休学する以前にも大学の長期休みを利用して、病院研修や医療系学生のミーティング、トレーニングなどで頻繁に海外へ行っていました。と、とんと休学していろんな現場でのボランティアなどを体験したいなと思いました。それと、政治や世界情勢にも興味があるのですが、政府が言っていることと、実際にそこに住む住民が感じていることに、ギャップがあるはずですから、その現地の人と直接話し、聞き、感じてみたいなと思っていました。²⁷

この文章は、まず以下のように理解できるだろう。小川さんは、大学で座学だけをしていても、看護学の専門的知識は決して自分の「体には入ら」なかった。たとえ期末テストなどのために必死に勉強し、看護学の基礎的事項を短時間で覚えたとしても、必ずしも身についたとは思えなかった。もちろん、長期休暇を利用して海外に出掛け、国際的な医療ボランティア活動を積極的に実践してはいたが、それでも大学で覚えたものは「頭から抜けていってしまう」感覚に陥っていた。立派な看護師になるのを夢みて、短大卒業後に大学に入学しなおす決心をした小川さんだっ

たが、そのキャンパスライフは退屈なものであった。そこで、彼女は「とんとと休学」をすることにし、海外のさまざまな現場でボランティア活動を行うことによって「現地の人と直接話し、聞き、感じて」みる機会を、つまり世界中の人々の暮らしを長い時間かけて体験することによって、自らの学びの場をつくろうと決心したのであろう。

では、彼女の決心の所以を辿ったうえで、さらに何が言えるだろうか。まずは、小川さんの決心は、退屈な日常生活からの脱却を図り、自ら非日常的な生活（＝世界一周旅行）を企図するものとみなせる。彼女の旅は、これまで生活してきた環境を変えることで自分の「役割」を問いなおし、必要であれば「自分を変える」ことを試みようとする「自分探し」の旅であるといえる。

次に、彼女が世界一周の旅へ出ようとして決心した意識は、彼女が看護師になろうと決め、大学への進学を決心したときも同様であるということである。彼女は大学で看護学を学ぶことで、いつかは国際的な医療活動に参加する看護師をめざそうと決心して、山口県立大学の看護学部に入学したのだろう。しかし、大学入学後、退屈なキャンパスライフを過ごすことは、彼女にとって日常に埋没して過ごすことをすぐさま意味したはずである。ゆえに、彼女はそうした退屈な大学生活から一旦脱け出し、世界一周の旅という非日常へ出て、国際医療や看護の現場や貧困地域を巡ろうと決めたのであろう。

こうした経緯で世界一周の旅を決意した小川さんは、その後、エチオピアのみならず、世界中の貧困地域や医療現場を訪れることでさまざまな経験をしたのだが、旅の終盤の心境は、旅を始めたときとはかなり異なったものであったと報告している。例えば、スイスを訪れたとき、その医療・福祉制度のレベル

の高さには目を瞠ったが、多くの貧困地域を潜ってきた彼女にとっては、そこである一つの根本的な問題に当たることになった。それは「一人ひとりが『しあわせ』を感じて生きられるような世界」はあるのか、というものである²⁸。その問いについて考えることで彼女の心境は、旅の前半と後半とで大きく変化した。確かに、貧困地域の人々の多くは厳しい生活を強いられている。しかし、その「一人ひとり、力強さ、優しさ、分かちあい、限らない創造力、あふれるエネルギーを持って」た²⁹。「先進国」の人々は「『途上国』と呼ばれる国の人々に対して、何を基準にして私たちは『貧しい』『かわいそう』という判断を下しているのだろうか、『貧しさ』という概念はだれが生み出したものなのだろうか」³⁰と、彼女は考えるようになったのである。当初、世界情勢に興味をもち、現地の人と直接会ってその息遣いを感じ取ることによって、貧困問題を解決する手がかりを得たいと考えた小川さんだったが、旅の終盤で、そうした考えが「単純」だったことに気づき、「今までのようには考えられなく」なってしまったのである³¹。こうした思いを抱えながら、彼女は最後にインドを訪れる。

旅の最後にインドを訪ねて、お釈迦様が悟りをひらかれたという、ブッダガヤへ行きました。緑が広がっている風景の中に民家があり牛がいる風景です。大好きな場所のひとつです。そこで「無理をしても仕方がない。肩肘張って頑張るのではなく、自然な状態がよい」と考えられるようになったんです。[…]旅に行く前に持っていた「世界を変えるんだ」という考えは少し変わり、自分ができることをして、世界が自然により方向へ変化する仕組みづくりをしたいなあと今は思っています。³²

看護師になるために大学に入学したけれどもそれに飽き足らず、「世界を変えるんだ」という意識にかられながら数々の貧困地域をめぐる旅に出かけたおよそ一年後、世界遍歴を経験した末に彼女が出した一つの結論は、「自然な状態がよい」ということであり、「世界が自然により方向へ変化する」ための仕組みづくりを模索することであった。「自然な状態」や「世界が自然により方向へ変化する」ことが具体的に何を意味するかについての詳しい記述はないが、長い旅を終えた時点での文脈であることからそれを推測すると、彼女はこの世界の豊饒さに感嘆すると同時にその複雑さを受け入れ、それらがそのままの形で保たれたうえで、自分ができることをするという心境に至ったのではないだろうか。まるで悟りを開いたかのような境地へ至ったとも読み取れるが、では、「自然な状態がよい」と思うことによって、彼女は何をなしたことになるのだろうか。また、このような心境へ至った彼女の意識は、旅を決心した頃のそれとどのようなかわりがあるのだろうか。

小川さんが看護師になろうと決めたとき、あるいは大学生活が退屈さに嫌気が差して非日常を求めたとき、彼女はそのための条件や環境が整ったうえで決意をしたり行動を始めたりしたわけではおそくないだろう。先述した通り、サルトルにおける基本的な意識のあり方とは、志向性をもつ意識であり、常に何かについての意識のことであった。それは、何かへと自己を炸裂させる意識であるとも主張されていた。このように考えれば、サルトルは、意識を条件や環境が整ってから動き出すようなものとは考えず、積極的に世界へ飛び出していくはたらきであると考えていたと理解できる。こうした志向性という意識のはたらきに即して言えば、小川さんの人生選択

も決して受動的なものではなかったと考えられるだろう。さらに、サルトルは、「われわれは、われわれ自身を選ぶことによって、世界を選ぶ」(ENⅢ93/508) のであり、「われわれはたえずわれわれの選択のうちに拘束されて」(ENⅢ97/509) いるのだとしている。このことより、大学に入学することを選択したときの彼女は、自分の世界を大学に入学して看護師を目指すべき世界として選択したのだと言える。また、大学入学後は、その世界を座学だけをしていても退屈な大学生活としての世界として捉え、それが世界一周の旅に繰り出すことで退屈さを克服しうる世界、あるいはフィールドへ出ることで座学中心であった自らの大学生活を変える世界として捉えなおされたのだろうと理解できる。こうして、外から条件づけられた環境によって彼女自身のための世界がつくられるのではなく、彼女は自分自身の自発性と呼べるようなものによって自分の世界を選ぶことを余儀なくされているのである。さらに言えば、彼女の世界選択の営みによって、そのたびに世界のほうが選びなおされるのである。もちろん、こうした世界選択の営みは、小川さんが大学進学を決意したり世界一周を決心したりしたことだけではなく、旅の終盤で「自然の状態がよい」という心境に至ったことにもあてはまる。世界遍歴を経験することで、彼女にとって、世界とは必ずしも単純ではなく、むしろ複雑さに満ちたものであり、その複雑さが保たれた「自然の状態がよい」とされる世界へと選びなおされたのである。

こうした彼女の世界選択の営みは、人間の存在そのものが全面的に自由であるとするサルトルの主張とあてはまる。また、こうした営みは、自分の環境を積極的に変えることで自分の「役割」を問いなおし、自分を変えようとする「自分探し」の本質に触れようとす

るものである。彼女は、短大から大学へ、大学から世界のフィールドへ、世界のフィールドからその自然の状態を尊重する世界へと、自らの世界を選択することによって、学びの場を自ら獲得しようとしたのであると考えられる。

ところで、ここへきて廣松の「役割存在」を持ち出し、小川さんは自分の世界を選ぶことは、単にそのたびに自分の役割を選んでいくにすぎないのではないかという意見も出されるかもしれない。つまり、それは、まるで能役者が場面によって能面を付け替えて登場するのと同じように、彼女はその都度世界を選んでいくだけなのだという指摘である。確かに、世界を選ぶこととは〈私〉が「役割存在」の枠内でしか生きていけないことを単に強調するだけに見えないかもしれない。しかし、問題は、なぜ〈私〉はその「役割」から逃れようとするのか、なぜ世界を選ばないかという点にあるのだ。この点について、まさに彼女がエチオピアでの経験を考察することで確認した、自分の意識の深層に垣間見える「否定性」を手がかりにすることで、解決の糸口が見出せるのだと筆者は考える。

例えば、サルトルは、待ち合わせをしている喫茶店に目当ての人が現れないとき、待ち合わせている者にとっては目当ての人が不在の(absent)喫茶店として捉えられるのだとしているが(EN I 85ff /43ff参照)、それと同様に、小川さんが大学の授業に退屈し、やがて休学して世界一周旅行することを思い立ったとき、彼女にとっての世界は、大学とは退屈であるべきではないのだとする世界が選ばれたのである。また、彼女が旅を終える直前に世界の複雑さをそのまま受け入れ「自然の状態がよい」と思ったとき、彼女にとっての世界は、世界とは単純なもので

あるべきではないものとして選ばれたのである。さらに言えば、サルトルは、私たちは「即自的構造において世界を選ぶのではなく、意味において世界を選ぶのである」(EN III 93/508)と主張するが、まさに彼女が世界を選びなおすとき、かつての世界に対して否定的な意味を伴わせて別の世界を選びなおすのである。このように、世界が選びなおされるとき、そこには明らかに「不断の消失 (un évanouissement perpétuel)」(EN I 88/44)があり、常に否定性を帯びているのである。よって、彼女は単に「役柄存在」としての枠内にとどまっているのではなく、彼女はその意識の深層において不断の否定性を孕ませながら世界を選択しているのである。こうして、小川さんの事例で検討したように、意識をもつ人間の存在構造は、基本的に彼女がエチオピアで直面した「自己欺瞞」としての〈私〉の意識の存在構造とまったく同じものなのである。

ただし、彼女は「役柄存在」ではないかもしれないけれども、依然として「自己欺瞞」の状態であり、不断に世界を選択しなおす活動を行ったとしても、そこから脱け出せないのではないかという指摘も考えられる。しかし、サルトルによれば、私たちは「自己欺瞞」から脱け出そうと「熟考された選択が問題ではない」のである(EN III 89/506)。「自己欺瞞」としての〈私〉の意識の存在構造というのは、〈私〉とは常に何かについての措定的意識であると同時に、その意識についても措定的に意識しているというはたらきをもつ非措定的意識が半透明性をもってあらわれているというものである。この非措定的意識が、常に何かについての否定的態度をとるものなのである。これは、とりもなおさず、「それがあらぬところのものであり、それがあるところのものであらぬ」という「対自存在」としての

構造である。つまり、〈私〉という存在は、「根源的否定」を意識の深層にもつ対自存在から逃れられないのだ。サルトルが「選択することが熟考することすべての根拠であり、[...]熟考することが根源的に選択することから出発する」(Ibid.)と主張するように、私たちが世界を選択することで重要なことは、選択した後の到達点ではなく、選択することそれ自体なのである。しかも、それは、「役柄存在」の枠にとどまった活動ではなく、「根源的否定」をもった「根源的選択 (un choix originel)」(Ibid.)なのである。

ここに来てようやく、意識を持つ人間の存在の構造に否定性が孕まれていることが、小川さんにとって何をもたらすのかについて、はっきりとした結論を出すことができる。本稿では、小川さんがエチオピアで経験した出来事については「自己欺瞞」の事例として考察し、彼女の世界一周旅行の決断に代表されるその行動力については「世界を選択すること」の事例として考察した。彼女の一連の活動をつぶさに見てとるためには、彼女の意識の深層に存在する「根源的否定」に着目することが重要だということが理解できる。また、その否定性によって支えられた意識が自由に世界を選択することによって、その都度彼女の世界の意味は更新されるのである。彼女が旅の決意を固めた意志やエチオピアの友人との関係で思い悩んだこと、インドで世界の豊饒さや複雑さをありのままに受け入れる心境に至ったことなど、すべてこの否定性を携えた意識のはたらきを忘れてしまったならば、彼女の存在自体を軽視してこれらの経験を知らうとすることになり、それは結局のところ彼女自身の世界の意味の豊かさ、すなわちその存在の魅力に迫れずに彼女のことを語るようになってしまうのである。

4. おわりに

以上のようにして、筆者は友人である小川さんの大学時代の遍歴を考察し、その意味を見出していった。もちろん、この考察は小川さんの事例のみにあてはまるのでは決してない。本稿は、彼女の行動が現代の若者に特有の「自分探し」の活動の一例であるとして検討したものである。よって、意識をもつ人間存在の根源性について考察することは、小川さんのみならず、現代の若者をも捉えられる試みでもある。筆者は、2-4. において、教育学を存在論的な次元で語ることの重要性を主張したが、その議論を踏まえながら、人間の意識の深層に孕まれる「根源的否定」の存在を確認することによって、現代の若者や大学生が人生の選択に直面して悩む際に、個人の意識ではどのような変化があり、どのように自己形成の過程を経るのかをいきいきと捉えることの必要性を、本稿全体で試みたのである。

さて、いま一度1.で議論した事柄に立ち返って本稿を整理づけるならば、私たちは思春期・青年期にある若者たちの悩みについてどのように理解のアプローチをなすべきなのだろうか。それは、単に人間の社会的役割の重要性において理解するだけでなく、〈私〉の存在の根源を問う形而上学的・存在論的な

アプローチを持って理解すべきだということである。さらに言えば、サルトルが主張するように、こうした人間の意識存在の根源には、自分自身ではつきりと捉えられないけれども、半透明性を持って認められる「否定性(négativité)」が孕まれているのであり、そのことによって、私たちは、「世界」についてはもちろん、自分の存在そのもの、すなわち意識の根源的レベルから問い直すはたらきをもっているのだ。こう考えることによって、若者たちは、自分たちが単にベルトコンベアのように漫然と社会へと投げ出されていくのではなくて、〈私〉自身がなぜ自分の人生を選択しているのか、〈私〉自身がなぜ悩んでいるのかについて、その都度、自らの存在の根源的レベルから理解して生きていると実感することができるのである。筆者は、筆者の友人である小川美農里さんによる「自分探し」活動の事例を挙げて考察することによって、彼女の生の魅力がその意識の根源に具わる否定性に由来するものと結論づけ、また多くの若者たちにも同様のことが言えるだろうとも主張した。このような形而上学的・存在論的な議論を教育学的な領域に、とりわけ若者や大学生の自己形成の問題にも取り入れて考察することによって、思春期や青年期にある若者たちについての研究に新生面が見いだせるはずであると、筆者は考える。

[注]

- ¹ 藤土圭三監修／堂野佐俊、田頭穂積、福田廣、熊谷信順、吉田一誠編著『心理学からみた教育の世界』（北大路書房、2004年）pp.85-87参照
- ² 森田伸子『子どもと哲学を 問いから希望へ』（勁草書房、2011年）pp.53ff参照
- ³ 森田前掲pp.15ff参照
- ⁴ 筆者が本稿で用いる〈私〉という表記は、哲学上の用語としては「自己」や「自我」とされてきた事柄を表す。しかし、筆者は、近年、自己や自我の問題を緻密に思索している永井均に

倣って〈私〉と表記する。というのも、サルトルが論じる自我も、永井が論じる〈私〉も、意識をもち、しかも世界で固有なものとして存在するという点で共通点をもつと筆者は考えるからである（永井均『〈私〉のメタフィジックス』勁草書房、1996年参照）。また、「私」という表記は、ある人が自分のことを私と呼んでいること、人称代名詞としての意味のみがあることである。〈 〉も「 」もない私という表記は、特に上記した内容を含まない場合のみ用いる。

- ⁵ 永井均『〈子ども〉のための哲学』（講談社現代

- 新書1301、講談社、2010年）p.114参照
- ⁶ 廣松渉『世界の共同主観的存立構造』（講談社、2007年）所収。初出は『情況』1972年4月号。なお、当時は「人間存在の共同性の存立構造」というタイトルであった。
- ⁷ 以下、サルトルのテキストからの引用は、本稿末尾の「文献」に記載する凡例にしたがって表記する。
- ⁸ 廣松前掲p.233
- ⁹ サルトルは「自己欺瞞」について論じる際、最初に囚人と見張り番の事例を挙げている（EN I 170/81参照）。
- ¹⁰ 廣松前掲p.235
- ¹¹ 同上
- ¹² 同上
- ¹³ 廣松前掲pp.239-240 強調は廣松。
- ¹⁴ 熊野純彦編著『日本哲学小史』（中央公論新社、2009年）p.145参照。
- ¹⁵ 「自己欺瞞la mauvaise foi」は、直訳すれば「悪しき信仰」である。ふつうこれは「不誠実」と訳すが、『存在と無』の訳者である松波信三郎は、サルトルはこれを「自己に対する不誠実」の意味で用いていると解釈し、その訳として「自己欺瞞」が適当である旨を註において述べている（EN I 598参照）。ちなみに、英訳では「bad faith」とフランス語に忠実に翻訳されており、本稿の英文題目もそれに倣った（英訳の文献は本校末尾の「文献」を参照されたい）。
- ¹⁶ 廣松前掲 p.236 強調は廣松。
- ¹⁷ 澤田直『新・サルトル講義 未完の思想、実存から倫理へ』（平凡社、2002年）p.53
- ¹⁸ 安溪遊地・安溪貴子編著『出すぎる杭は打たれない 痛快地球人録』（みずのわ出版、2009年）p.12
- ¹⁹ 安溪前掲p.20
- ²⁰ 同上
- ²¹ 同上
- ²² 安溪前掲p.21
- ²³ 同上
- ²⁴ 安溪前掲pp.21-22 強調は筆者。
- ²⁵ 安溪前掲pp.22-23 強調は筆者。
- ²⁶ サルトルはこの言葉に括弧をつけて「自己（についての）非措定的意識（la conscience non-thétique (de) soi）」とする。「…についての」というdeは、ある意味では認識の観念としての意識を指すように思われるからである（EN I 38/20参照）。『存在と無』邦訳者の松浪信三郎によれば、日本語ではこの語を単に「自己意識」と解してよいとしている（松浪信三郎『サルトル』勁草書房、1976年、p.47）。
- ²⁷ 安溪前掲p.13

- ²⁸ 安溪前掲 p.29
- ²⁹ 安溪前掲 p.30
- ³⁰ 同上
- ³¹ 安溪前掲pp.30-31
- ³² 安溪前掲 p.31強調は筆者。

【文献】

○ 凡例

以下の文献からの引用については、以下のよう
な略号と頁数のみを文中（ ）内に註記した。な
お、これらの文献の原著はすべてフランス語であ
るが、本稿執筆では邦訳を中心に参照しながら適
宜原著に当たり、ところどころでは改訳して引用
した。スラッシュ（/）のまえに、邦訳の巻数をロー
マ数字で、頁数を算数字で記し、スラッシュ（/）
のあとに、原著の頁数を記した。また、(Ibid.)と
いう表記は、邦訳・原著ともに前掲の文献と同頁
の場合に示す。

- EN：サルトル『存在と無』松波信三郎訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2007年 Sartre, Jean-Paul. *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*, tel; Gallimard, 2010
- TE：サルトル『自我の超越 情動論素描』竹内芳郎訳、人文書院、2000年 Sartre, Jean-Paul. *La transcendence de l'Ego*, Librairie Philosophique J. Vrin, 1965
- SI：サルトル「フッサールの現象学の根本的理念—志向性—」白井健三郎訳、『シチュアション I』佐藤朔ほか訳、人文書院、1972年 Sartre, Jean-Paul. "Une idée fondamentale de la phénoménologie de Husserl" in *Situation I*, Gallimard, 1968

○ その他、引用文献〔引用順〕

- 藤土圭三監修／堂野佐俊、田頭穂積、福田廣、熊谷信順、吉田一誠編著『心理学からみた教育の世界』北大路書房、2004年
- 森田伸子『子どもと哲学を 問いから希望へ』勁草書房、2011年
- 永井均『〈私〉のメタフィジックス』勁草書房、1996年
- 永井均『〈子ども〉のための哲学』講談社現代新書1301、講談社、2010年
- 廣松渉『世界の共同主観的存立構造』講談社学術文庫998、講談社、2007年
- 熊野純彦編著『日本哲学小史』中公新書2036、中央公論新社、2009年
- 安溪遊地・安溪貴子編著『出すぎる杭は打たれない 痛快地球人録』みずのわ出版、2009年

- 松浪信三郎『サルトル』勁草書房、1976年
- 澤田直『新・サルトル講義 未完の思想、実存から倫理へ』平凡社新書141、平凡社、2002年
- 参考文献
- 浪本勝年、三上昭彦編著『「改正」教育基本法を考える 一逐条解説一』北樹出版、2007年
- 古荘真敬『呼びかけられる私、呼びかける私』（松永澄夫、浅田淳一編著『哲学への誘い—新しい形を求めて V 巻 自己』）東信堂、2010年
- 遠藤野ゆり「或る自立援助ホームにおける—少女の意識の変化—サルトルに基づく「他者関係」の解明—」（『学ぶと教えるの現象学研究 十』）東京大学大学院教育学研究科学学校教育開発学コース、2004年
- 中田基昭「サルトル『存在と無』に基づく人間研究の意義」（『学ぶと教えるの現象学研究 十一』）東京大学大学院教育学研究科学学校教育開発学コース、2006年
- Catalano, Joseph. S. *A Commentary on Jean-Paul Sartre's "Being and Nothingness"*. Harper & Row, Publishers, 1974